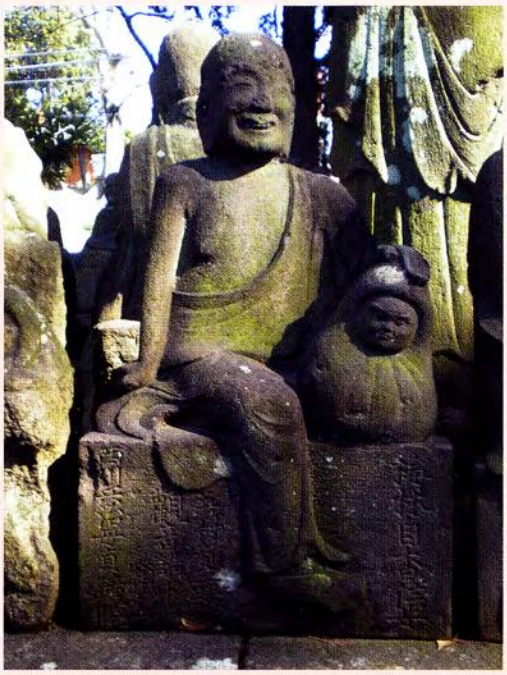
川越市立博物館

博物館だより

第56号

「喜多院日鑑」(喜多院蔵) 文政5年11月5日条



喜多院五百羅漢

喜多院日鑑と五百羅漢

日鑑(にっかん)とは日記に類したもので、寺社や諸機関において、その担当者が日々の出来事などを記した公的な記録です。埼玉県指定文化財の喜多院日鑑は、寺内の事務を統轄した知事が日々の動向を記録したものです。そのためその表紙には「知事録」、「知事雑録」などと記されています。江戸時代の喜多院の機構では、最高責任者である住職の下に、寺内全般の事務を受け持つ知事という役職がおかれていました。現在、喜多院日鑑は宝暦8年(1758)から明治3年(1870)までの98冊が確認されています。喜多院日鑑は、寺内の出来事のみならず、城下の様子も知ることができる貴重な記録です。幸いなことに、98冊すべての翻刻作業が終了し、全16巻の史料集として刊行されました。この喜多院日鑑の中に五百羅漢成立の記録が収められていることは、刊行の監修者である宇高良哲氏が既に報告していますが、ここに改めて紹介します。

これまで喜多院五百羅漢の造立については、入間郡北田島村の百姓で後に出家した志誠(しじょう)が願主となり、天明2年(1782)に着手し、志誠は羅漢40体ほどが完成したところで亡くなり、その遺業を喜多院の3人の僧侶が引き継いで、文政8年(1825)に全てが完成したとされています。

「日鑑」における五百羅漢造立の記事は、文政5年(1822)10月26日の条に上野寛永寺塔頭(たっちゅう)との往復書簡が収録されており、造立の願いは寛政8年(1796)4月に出され、同年12月22日に幕府寺社奉行から許可が下りていることがわかります。またその完成を意味する開眼供養の記事は、文政5年11月5日、同6年正月15日、2月5日の各条にあり、当初文政6年2月15日から22日までを予定していましたが、事情により3月1日から7日と変更になっています。その開眼供養も5日間延長され、結願(けちがん)したのは3月12日でした。また、これまで五百羅漢完成の根拠とされてきた文政8年銘の阿弥陀如来像については、文政6年12月6日条などにその記事が見え、同8年3月17日の条に、「石阿弥陀出来仕候」とあります。

川越城本丸御殿の杉戸絵

1　はじめに

近世城郭の御殿は、武家住宅を象徴する書院造の建物です。そこは、藩主の居館や政務の場所として、また、将軍の上洛等における宿舎として使用されました。御殿の内部は、部屋ごとにテーマで描かれた障壁画によって飾られていました。その障壁画は、襖絵・杉戸絵・天井板絵などに大別されます。

襖は、基本的に部屋と部屋との仕切りとして用いられました。杉戸は杉板の仕立て戸で、入側や廊下の仕切りに使用されました。その絵は、戸の板面に直接描かれました。天井板絵は、格式の高い部屋や入側の天井に使用された格天井の各板間に描かれました。江戸時代の御殿障壁画は、江戸幕府御用絵師である狩野派一門によって制作されました。狩野派では御殿障壁画を描くにあたって、伝統的な規格がありました。それは、障壁画の画題は部屋の格に呼応し、格の高い方から、山水・人物・花鳥・走獣という順で描かれました。技法的にも、格の高い方から水墨画・淡彩画・金地濃彩画という順に定められていました。

名古屋城本丸御殿を例に挙げると、次のようになります。

場所	画題	技法
上洛殿 （将軍の宿舎）	帝鑑・琴棋書画図	水墨画
対面所 （内々の謁見の場）	名所・風俗図	淡彩画
表書院 （正式な謁見の場）	花鳥図	金地濃彩画
玄関	虎や豹の走獣	金地濃彩画

（『本丸御殿の至宝　重要文化財名古屋城障壁画』2007　名古屋市博物館特別展図録より）（表１）

川越城本丸御殿の障壁画では、杉戸絵が現存しています。ここでは、その杉戸絵の紹介を行います。

2　川越城本丸御殿の杉戸絵

幕末の嘉永元年（1848）９月に完成した川越城本丸御殿は、藩主の居館や政庁の場として使用されました。これは、二の丸にあった御殿が弘化３年（1846）４月に焼失し、本丸に御殿を再建したためです。つまり、二の丸御殿が本丸に移転し、機能はそのままで、名称のみが変わったということです。

御殿の建物は、表・中奥・奥の三つに分類されます。表は、城内の儀式や会議、藩士が政務を執り行う公的な場です。中奥は、藩主が政務をみたり生活をする場で、藩主の公邸にあたります。奥は、主に藩主夫人や女中たちが生活する私的な場です。

川越城本丸御殿は、現存する平面図から建物の空間を分類すると、次のように大別されると考えられます。

空間	部屋名称
表	大広間・家老詰所・御書院
中奥	御寝所・御居間・御小書院
奥	長局・料理賄方

（表２・図１）

これらの空間の中で、御殿障壁画が描かれた主な部屋を格式の高い順に整理しますと、次のようになります。

場所	機能
御寝所・御居間	藩主の私的生活の場
御小書院	藩主が政務をみる場、身内などの内々の対面の場
御書院	一般的な表書院に該当し、藩主と家臣の正式な謁見の場
大広間	藩士が政務を執り行う場・控えの場

（表３）

これらの場所は、他の城の御殿同様に、各部屋の襖・杉戸・天井などが、それぞれ格式に応じて定められたテーマで描かれていたと考えられます。やがて明治維新を迎え、川越城は明治３年（1870）頃から廃棄が始まりました。その影響で城内の建具類も売却や払下げ等が行われ、現在御殿障壁画の遺品では、杉戸絵だけが現存しています。

その杉戸絵の概要をまとめると、次のようになります。

杉戸絵は、岸村（現川越市岸町）名主舩津蘭山（1808～1873）によって制作されました。蘭山は、浅草猿屋町代地系狩野章信の高弟、岐部時信から直接画技を習得しました。制作期間は「舩津家日記」（舩津的美氏蔵）から、嘉永３年（1850）６月７日から安政２年（1855）１月29日までと、安政３年（1856）３月６日から同年４月９日までの、二回に分けて制作されたことがわかりま

す。しかし、制作した総枚数や配置場所等、具体的な内容は記されていません。

現存する杉戸絵は、14枚22面(川越市立博物館蔵)・4枚8面(ふじみ野市立上福岡歴史民俗資料館蔵)・8枚16面(個人蔵)の計26枚46面です。全体的に剥落や磨滅が激しく、保存状態はあまり良くありません。その他杉戸絵に関連する資料として、下絵・舩津家日記・川越城本丸住居絵図(舩津的美氏蔵・写真1)があります。これらは、杉戸絵を制作した舩津家に伝来した資料です。

(1) 杉戸下絵

現在、杉戸下絵は25枚あります。これは制作当初の総数ではなく、一部のみが残っている状況です。現状は、和紙製の三種類の袋(1・2・3)に折り畳んで納められています。3のみ茶色の筋が入った袋となっています。各袋の表紙と裏面には墨書があります。

下絵は半紙をつぎ合わせた原寸大のほぼ半分の大下絵で、1枚で1面をあらわす構図となっています。ほとんどが墨画で、一部墨画に彩色が施されています。また、作者の署名等はなく、裏に注記が記されています。注記の仕方や画題は、納められた袋ごとに異なっています。袋や下絵の特色をまとめると、次の表のようになります。

	表紙の墨書	裏面の墨書	注記の仕方	画題	枚数
1	御書院御杉戸　松　下画	丑　五月　蘭山	イ右～リ左	松	18
2	御玄関御杉戸　下画　浪		坤右～乾左	浪	4
3	御殿御杉戸　蘆雁	安政五年仲秋 (1858年8月)	右一～左一	蘆雁	3

(表4)

これら下絵は三種類に大別され、各袋表紙に記された場所の杉戸下絵、つまり、御書院・御玄関・御殿部分の杉戸下絵と考えられます。但し、3の袋は1・2の袋と仕様が異なり、また、表書が抽象的な表記となっています。そして3のみ、安政5年の年号が記されています。そのため、3の下絵は、1・2の下絵とは異なった状況で制作された可能性も考えられます。

このような内容の下絵と一致する現存の杉戸絵は、全部で10枚13面あります。その中で、当初の配置場所を推定できる杉戸絵は、6枚10面あります。場所は御書院で、画題はすべて松です。

一方、配置場所を確定できる杉戸絵もあります。それは、林和靖図(ふじみ野市立上福岡歴史民俗資料館蔵・写真2)です。林和靖図は、下絵は現存していません。しかし、本杉戸の框上部の側面に墨書で、「御居間北御入側東側ノ内」・「御居間北御入側東側ノ外」と、配置場所が記されています。このため、林和靖図の当初の配置場所は、藩主居間の北入側の東側と確定されます。このことから、制作当初のすべての杉戸絵には、配置場所が框の側面に墨書で記されていた可能性も考えられます。

残り8枚21面の杉戸絵は、墨書もなく下絵とも一致しないため、当初の配置場所を推定または特定できない状況です。

(2) 川越城本丸住居絵図 (舩津的美氏蔵)

現在川越城本丸御殿を描いた平面図は、2点あります。1点は、川越藩最後の藩主、松平周防守家に伝来し、慶応3年(1867)頃に作成されたと考えられる図面です。(光西寺蔵) もう1点は、今回紹介する図面です。この図面は舩津家に伝来した由緒から、藩主松平大和守家時代で、本丸御殿が再建された嘉永元年(1848)以降の平面図と思われます。

本図には、各部屋の名称・広さ・柱の位置等が詳細に記されています。

特に、朱書で1～27の注記があり、6ヶ所に「片面」と、1ヶ所には「是分帯戸」と朱の注記があります。本図の由緒からこの注記は、御殿内の杉戸絵の位置を示していると考えられます。「片面」とは、一面のみ絵が描かれた杉戸絵を示していると考えられます。「是分帯戸」とは、戸の形態を示していると考えられます。

本絵図では、杉戸絵が描かれた場所は27ヶ所あり、総数46枚82面であったことが読み取れます。

また、位置が特定できる林和靖図は、本絵図では「8」に該当します。(写真3)

ただ、本絵図の注記と杉戸下絵の注記の仕方は異なっているため、両資料の関連性については、現在のところ不明です。

3　まとめ

川越城本丸御殿の杉戸絵は、制作当初の全貌が不明で、かつ現存する杉戸絵は、一部分のみという状況です。その現存する杉戸絵も、明治時代以降、様々な変遷を経て今日に至っています。このため、川越城本丸御殿の制作当初の杉戸絵の配置場所を推定することは、非常に困難なことです。

また御殿障壁画は、部屋の格式に応じて画題が定められていたので、襖絵は、描かれた画題によって部屋

を推定することは可能です。しかし杉戸絵は、襖絵ほどはっきりと、部屋によって画題が定められてはいないように思われます。これは、「江戸城障壁画下絵」（東京国立博物館蔵）に描かれた杉戸絵からもうかがわれます。こうしたことから杉戸絵の場合は、画題によって配置場所を推定することも難しいことと考えられます。

ただこうした状況の中で、林和靖図は、本丸御殿の制作当初の配置場所を特定できる唯一の杉戸絵として、大変貴重な資料です。

杉戸絵は、大変不明な部分が多い資料です。しかし、川越城本丸御殿の障壁画を偲ぶことができる貴重な資料でもあります。

現在川越城本丸御殿は、平成23年春（予定）まで修理工事中のため、御殿内を見学することができません。そのため市立博物館では、平成21年5月から、杉戸絵を定期的に展示する予定です。また、同年秋には杉戸絵に焦点を当てた企画展も予定しています。

（学芸担当　井口信久）

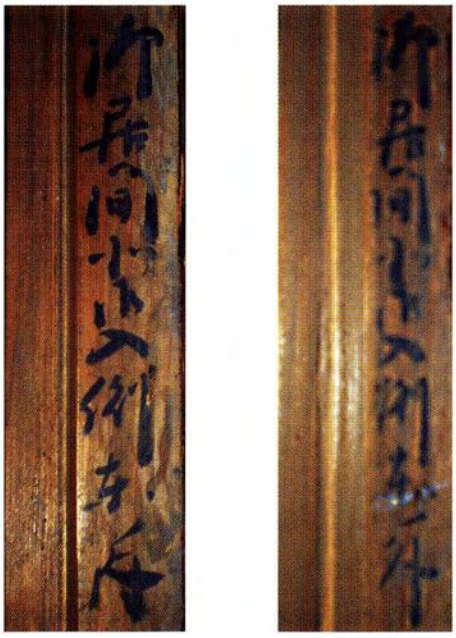
｛付記｝今回の資料紹介にあたり、資料所蔵者である舩津的美氏・ふじみ野市立上福岡歴史民俗資料館から多大な御協力を得ました。ここに厚くお礼申し上げます。

【主要参考文献】

『江戸城本丸等障壁画絵様　本文・図版編』東京国立博物館　1988

写真2-1　林和靖図
（ふじみ野市立上福岡歴史民俗資料館蔵）

写真2-2　裏面・龍図（同上）



林和靖図框部分の墨書

写真3（写真1の拡大部分）

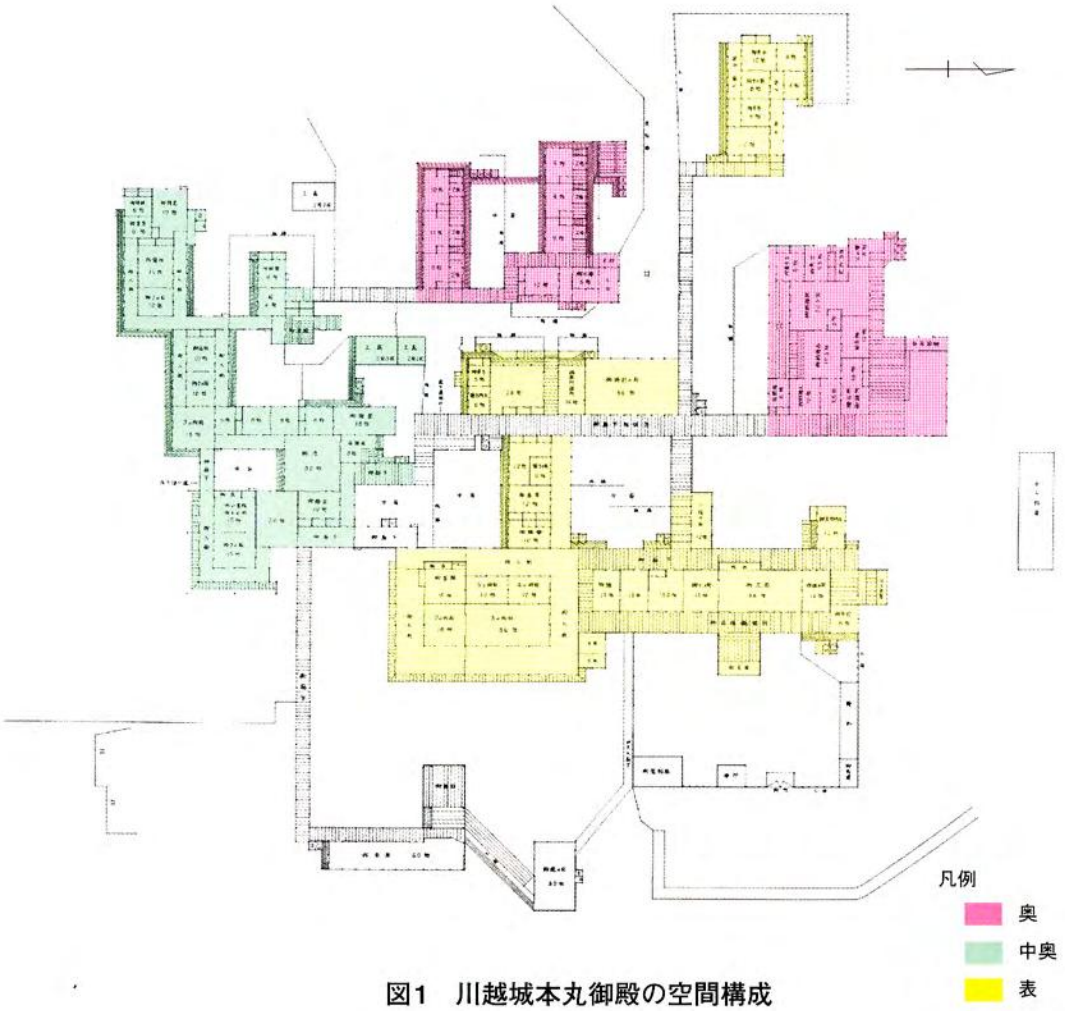


図1　川越城本丸御殿の空間構成

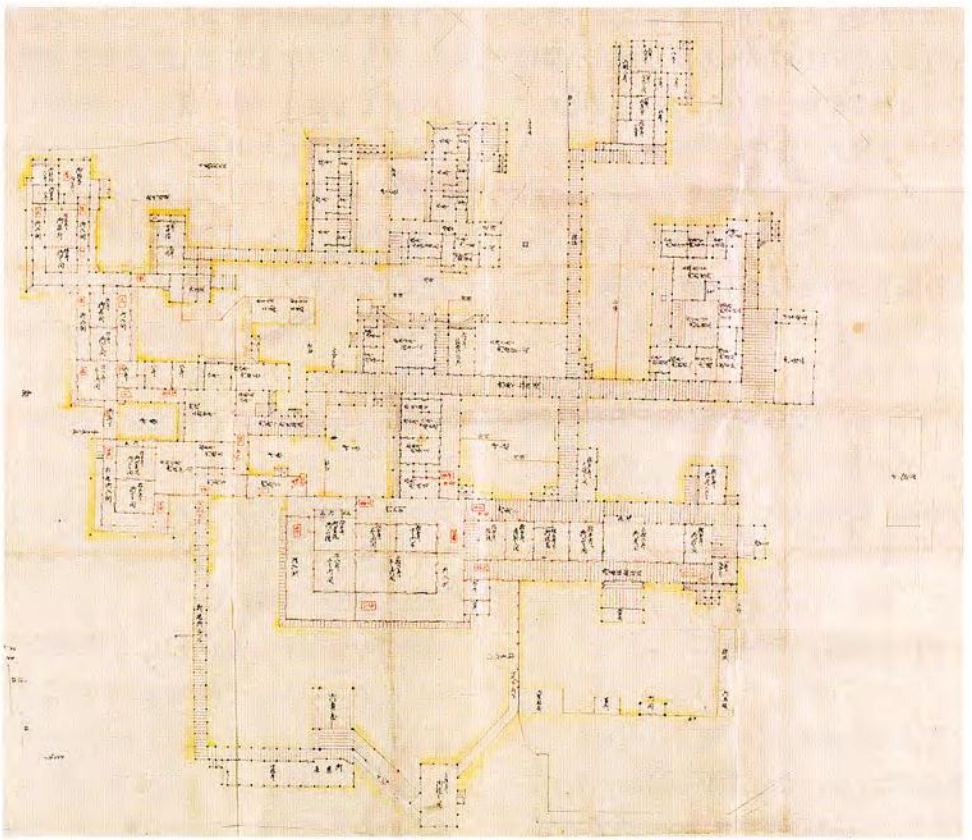


写真1　川越城本丸住居絵図(舩津的美氏蔵)

「川越の職人」コーナー

芋せんべいと焼き芋

1 芋せんべい

芋せんべいは、薄く斜め切りしたサツマイモを型バサミなどで焼き、その両面に砂糖を溶かした蜜を塗って乾燥させた菓子です。パリッとした歯ごたえとサツマイモの香ばしさが好まれ、素朴ながらも味わい深いものとなっています。芋せんべいは、今日ある川越の芋菓子の原点ともいうべきものです。川越の芋せんべいの起源については、諸説あってはっきりしませんが、日露戦争(1904～1905)頃には地元で知られた菓子であったようです。芋せんべいの製造工程は、おおよそ次のようになっています。

(1) サツマイモをカンナで斜めに2～3mmの厚さにスライスし、それを型バサミで焼く。

(2) 焼きあがったサツマイモの生地に、砂糖を溶かした蜜を刷毛で塗る。

(3) 金網の箱に入れて乾燥させる。

・カンナ

カンナは、大工道具用のカンナを逆に取り付けたもので、滑らせる所はガラス板となっています。

・型バサミ

薄くスライスしたサツマイモを手焼きする道具です。これには小型のものと大型のものがありました。小型の型バサミは1台で3～4枚の生地を焼くことができました。一人が7台の型バサミを使いこなすのが基本だったようです。

大型の型バサミは昭和30年頃から使われるようになったといいます。これは小型のものより扱いやすく、また1台の型で10～15枚の生地を焼くことができました。

・芋せんべいのサツマイモ

芋せんべいに使うサツマイモは、昭和10年代までは「紅赤」(ベニアカ)が使われてきました。戦後の一時期には、収量の多い「沖縄100号」を使用したこともありましたが、その後は食味が良い「農林1号」「ベニ農林」「高系14号」などが使われました。現在はほとんどの店が、芋せんべいには「ベニアズマ」を使用しています。

・松野屋の看板

平成8年(1996)頃まで芋せんべいを製造・販売していた「松野屋」(川越市仲町)は、大正5年(1916)に大谷次郎が創業したものです。大谷次郎は芋せんべいの製法を、大工町の八百屋「芋龍」(別の聞き取りでは「清水リュウ」

という人)に習ったといいます。松野屋は、最初は市内杉原町(現末広町)で営業していましたが、その後志義町(現仲町)に移りました。

松野屋では、9月から翌年5月までは芋せんべいと焼き芋を販売し、6月から8月の夏場には氷屋としてかき氷などを売っていました。芋せんべいは、正月やお彼岸・お盆の時期には贈答用としてよく売れたといいます。

2 焼き芋

江戸では江戸時代後期に、焼き芋を売る店が多く現れました。江戸時代の風俗を記した『嬉遊笑覧』(天保元年[1830]成立)には、「焼芋売る処何れの町にも二三ヶ所あらぬ処もなし」とあります。

焼き芋は最初、焙烙(はうろく)で焼いていましたが、やがて大きくて浅い鋳物の平鍋を使うようになりました。焼き芋には、サツマイモを丸ごと焼く「まる焼き」と、はす切りなどにして焼く「切り焼き」がありましたが、江戸ではまる焼きが好まれたようです。そのため焼き芋屋の看板には「○焼き」と記したものが多くありました。

明治時代になっても、焼き芋は庶民の食べ物として好まれ、焼き芋を専門に販売する店が続々と現れました。当時の焼き芋屋は秋から翌春までの半年間の商売でしたが、夏場に氷を仕入れて氷屋になる店が多かったといいます。

戦後になると、小石を使ってサツマイモを焼く道具をリヤカーに乗せた「石焼き芋」という商売が現れました。石焼き芋は、特製のリヤカーで町中を自由に売り歩くことができたため、飛ぶように売れました。

・焼き芋屋の看板行燈

江戸の焼き芋屋の看板は、「○焼き」と書くものが多かったようです。その他のサツマイモの看板には、「八里半」とか「十三里」という文字を掲げるものもありました。「八里半」とは、栗の味に似ているがわずかに劣るという意味です。また「十三里」とは、栗(九里)より(四里)うまいという意味です。(学芸担当　大野政己)

分館だより　―川越市蔵造り資料館の階段―

資料館が煙草卸商「万文」だった頃、店蔵を抜けると土間を挟んで、住居部分がありました。この建物は木造２階建てで、１階には８畳・５畳・６畳の和室３室と一部が濡縁になった廊下、脱衣所を設けた風呂場などがあり、２階には８畳と廊下が配されていました。土間は「中の間」として床が貼られ、建物として一体的に使われており、店蔵から住居部分に直接入ることができました。現在では住居棟として、中の間部分の５畳半（うち１畳分は板張り）と１・２階の和室８畳のみが残存しています。

住居棟には２階への階段２箇所設えてありますが、「東階段」は見学者用に使用しており、１階から２階まで畳１枚分(長さ１間)の空間で上がるように作られています。そのため、１畳半(長さ１間半)で２階に上がる現在の一般住宅の階段に較べると勾配が急になっていることを意味しています。また、階段の足を置く部分（踏面）の奥行きが狭いため、普通にまっすぐ昇り降りするにも不自由になっています。このように、資料館の階段が昇り降りしにくい原因は、勾配が急であり、足をまっすぐに置けない階段であることにあります。

では、古い建物の階段はどのように足を運べばよいのでしょうか。ここで重要なのは当時の人々の服装です。資料館が建てられた明治26年頃は、まだ和服の方も少なくなかったことでしょう。和服の場合、大きく足を振り上げることはせず、裾を気にしながらしずしずと階段を昇り降りしたと考えられます。おそらく、体を半身にして、足を踏面に対して斜めに置くようにして、昇り降りしたのではないでしょうか。これならば、足を大きく振り上げることもなく、和服でも裾が乱れず、しかも安全に昇り降りができたことでしょう。

資料館の階段は少ない空間を合理的に利用した階段ですが、その昇り降りには当時の習慣を鑑みると、十分な機能を満たしているとすることができます。みなさんも資料館を見学される際は足元に目を向けて、階段をご利用の際はからだを斜めにして昇り降りをされるようにお願いします。くれぐれも蹴込板を蹴破らないようご注意ください。

（教育普及担当　天ヶ嶋岳）

第32回企画展

諸願成就 だるまさん大集合

平成21年3月28日(土)～5月10日(日)

子どもの玩具として、また、諸願成就の縁起物として、江戸時代からみんなに親しまれているだるまさん。

このたびの企画展では、全日本だるま研究会の御協力を得て、地元喜多院ゆかりの川越だるまをはじめ、全国各地のだるまが一堂に会することとなりました。

この企画展が、たくさんのだるまと触れ合える場となり、だるまを作る人と求める人の双方の思い入れを感じていただけたら幸いです。

川越大だるま
(喜多院蔵・全日本だるま研究会奉納)

利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越市蔵造り資料館	共通入館(観覧)券		
			•博物館 •美術館	•博物館 •蔵造り資料館 •美術館	•博物館 •蔵造り資料館 •美術館 •まつり会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	300円	370円	600円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	150円	180円	400円

※(　)内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合

◆開館時間　午前9時から午後5時まで(ただし入館は午後4時30分まで)

◆休館日　月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)
第4金曜日(休日を除く)年末年始(12月28日～1月4日)
館内消毒(6月下旬)　特別整理期間(12月下旬)

＊開館時間・休館日は、博物館・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ
(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館、蔵造り資料館は1月2日から開館)

交通案内

東武東上線・JR川越線　川越駅より
または西武新宿線　本川越駅より、
・東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス停下車徒歩8分、または「小江戸名所めぐり」乗車博物館前バス停下車徒歩0分
・イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物館・美術館前バス停下車徒歩0分
※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。

川越城本丸御殿は保存修理のため、平成20年10月21日から平成23年3月(予定)まで休館しています。

平成21年 4月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

5月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

6月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

7月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

※●印は2館休館(博物館、蔵造り資料館)、●印は1館休館(博物館)

編集後記

博物館の分館である川越城本丸御殿は、昨年10月から保存修理工事が行われています。そのため入口付近は、高い仮囲いの壁に覆われ、この仮囲いには、川越城や本丸御殿に関する絵図、修理前の本丸御殿内部の様子を写した巨大なグラフィックシートが貼り付けてあります。普段見ることのできないサイズの絵図にびっくりです。ぜひ一度御覧いただければと思います。

発行日　平成21年3月20日　　発行　川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1　☎049-222-5399　FAX 049-222-5396
Eメール　hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp
ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/